

龍谷2022.2.14

大門1

問1: 第1段落の内容と一致するもの

この段落は英語の成立過程(ゲルマン民族の移住から近代英語まで)を扱っている。

- ① Few people know the English language comes from Britain.
- 【不適】本文冒頭に "the one that everybody can most easily identify (おそらく誰もが最も簡単に特定できるもの)" とあり、「ほとんどの人が知らない」という記述と矛盾する。
- ② English has developed under the influence of other languages.
- 【正解】本文中に、古ノルド語 (Old Norse)、フランス語 (French)、ラテン語 (Latin) などが混ざり合って発展した歴史が詳しく記述されている。「他言語の影響下で発展した」という内容は本文の核心である。
- ③ The Vikings and Normans brought Old English to Britain.
- 【不適】古英語 (Old English) の基礎を持ち込んだのは、5世紀に定住したゲルマン系の三部族 (Jutes, Angles, Saxons) である。ヴァイキング (Vikings) やノーマン人 (Normans) は、すでにブリテン島にあった言語に「影響を与えた」側である。
- ④ It was not until the 20th century that English became what it is now.
- 【不適】本文最後に "by around 1550, Middle English became Modern English (1550年頃までに、中期英語は近代英語になった)" とある。「20世紀になってようやく」という記述は誤りである。

問2: 下線部②について内容と一致しないもの

英語史の各段階における記述の正確性を問う問題である。

- ① 英語の歴史は、ゲルマン諸語を話す部族が5世紀にイングランド南部に移住したところから始まった。
- 【一致する】第1段落の第2文 "which began when Germanic-speaking tribes... settled... in the 5th century" の内容と合致する。
- ② 古英語はゲルマン諸語と、ヴァイキングの話す古ノルド語が次第に結びつき、混じり合うことで誕生した。
- 【一致する】 "...mixed with Old Norse, spoken by Vikings... and became Old English" という記述の通りである。
- ③ 中期英語はノルマン人の侵攻後、彼らの話していたフランス語の影響を受けずに古英語が変化したものである。

・【正解(不一致)】本文には、中期英語はフランス語、古英語、ラテン語の「3つの言語の組み合わせ(combination of three languages)」であると明記されている。「フランス語の影響を受けずに」という点が明確な誤り。

・④ 16世紀中頃までには、中期英語が近代英語へと変化した。

・【一致する】"Finally, by around 1550, Middle English became Modern English" の内容と一致する。

問3: 下線部③「One of the results」について適切なもの

英語の複雑な歴史が「イギリス人の名前」に与えた影響についての問い。

・① 英国人の名前はケルト諸語とコーンウォール語に由来する。

・【不適】ケルト語やコーンウォール語は、例として挙げられている Sellick の由来に過ぎない。名前全体がこの2つだけに由来するわけではない。

・② 英国人の名前にはさまざまな言語が入り交じっている。

・【正解】下線部直後の "British names are often a mixture of various languages" をそのまま言い換えた内容であり、最も適切。

・③ 英国人の名前からはイングランド南西部の出身者が多いことがわかる。

・【不適】本文では Barton が北部(north)、Sellick が南西部(southwest)の出身である可能性を示唆しているが、「南西部の出身者が多い」という一般化はされていない。

・④ 英国人は自分の名前の一部を、先祖の名前からもらうことが多い。

・【不適】名前が「先祖のルーツ(出身地など)のヒントになる(give hints)」とは書かれているが、先祖の名前を継承するという習慣については言及がない。

問4: 下線部④「John」について一致するもの

固有名詞 John の語源に関する詳細を問うている。

・① 古英語で「恵み深い」という意味をもつ語であった。

・【不適】「恵み深い(Yahweh is gracious)」という意味を持つのはヘブライ語の Yōhānnān であり、古英語ではない。

・② 旧約聖書の原語であるヘブライ語に由来する。

・【正解】"John comes from Yōhānnān, which means... in Hebrew — which was the original language of the Old Testament" という記述に完全に合致する。

- ③ ヘブライ語で「人目をひく」という意味である。
- 【不適】「人目をひく(conspicuous)」は、コーンウォール語由来の Sellick の意味である。
- ④ 古英語の Yōhānnān に由来する女性の名前であった。
- 【不適】Yōhānnān はヘブライ語であり、また John が女性の名前であるという記述も本文にはない(一般的には男性名)。

問5: 空所⑤-1、⑤-2に入る最も適切なもの

文脈から論理関係を推論する問題。

- ⑤-1の文脈: John や Barton などの具体的な名前の由来を挙げた後、「(つまり)多くのイギリス人は名前を通じて家族の歴史を辿ることができる」と結論づけている。
- ⑤-2の文脈: 英語にはフランスのアカデミーのような中央機関がないという事実を述べた後、「(つまり)それぞれの形態の英語は一般的に平等と見なされる」と補足説明している。
- ① On the other hand(他方では)
- 【不適】対比を表すが、ここでは前後の内容は対立していない。
- ② In other words(言い換えれば、つまり)
- 【正解】⑤-1では具体例から一般論へのまとめ、⑤-2では原因から結果(言い換え)への橋渡しとして、両方に完璧に適合する。
- ③ Officially(公式に)
- 【不適】⑤-2の「中央機関がない」という文脈の後に「公式に(平等とされる)」と置くのは一見通るようだが、⑤-1の文脈(名前の由来のまとめ)には合わない。
- ④ Rarely(めったに～ない)
- 【不適】否定的な文脈を作る副詞であり、いずれの箇所の論理構成にも合致しない。

問6: 下線部⑥の段落内容と一致しないもの

この段落は英語の「膨大な語彙数」と「他言語を吸収する柔軟性」について述べている。

- ① It seems that no other language has more words than English.
- 【一致する】本文に "English probably has the largest vocabulary of any language(英語はおそらくあらゆる言語の中で最大の語彙を持っている)" とある。
- ② English's flexibility allows it to easily absorb new words and use them.

- 【一致する】"...gives English a great deal of flexibility. English also absorbs words from foreign languages very easily." という記述と合致する。
- ③ English has two words for the French word boeuf.
- 【一致する】本文の例として、フランス語では boeuf という一語で「牛」と「肉」の両方を指すが、英語では cow(牛)と beef(肉)の2つの言葉を使い分けていると説明されている。
- ④ The English language developed without a large vocabulary.
- 【正解(不一致)】段落の冒頭に "English has a very large vocabulary" とあり、OEDには50万語以上が掲載されていると述べられている。「大きな語彙なしに発展した」という記述は正反対の内容である。

問7: 空所⑦に入る最も適切なもの

比較の構造を理解する必要がある。

- 文脈: "Words like sushi and karaoke are as much a part of (⑦) today as they are originally a part of Japanese."
- 構造: 「sushiやkaraokeといった単語は、もともと日本語の一部であるのと同様に、今日では(⑦)の重要な一部となっている」
- 正解: ② English
- 文脈上、日本語から取り込まれた外来語が、現在の「英語」において完全に定着していることを述べているため、Englishが最適である。他の選択肢(Japanese, French, language)では比較の対照として不自然である。

問8: 下線部⑧の段落内容と一致しないもの

英語の拡散状況と、科学・ビジネスにおける統計的な実態を問う問題である。

- ① For hundreds of years, English was the language of the British Empire.
- 【一致する】"Between the 17th and 19th centuries, English spread... as the language of the British Empire" とあり、数百年にわたる大英帝国の公用語であった事実在即している。
- ② U.S. economic influence helped spread English more widely.
- 【一致する】"...as the language of business as America's economic power developed through the 20th century" という記述と合致する。
- ③ Most scientific papers are written by English native speakers.

•【正解(不一致)】本文には "over 90 percent of scientific papers are written in English, even though fewer than half of the authors are native speakers of English" とある。「科学論文の9割は英語だが、著者の半分以上は非ネイティブである」という記述に反するため、これが正解となる。

• ④ English is the international language of science and business.

•【一致する】"English has become the international language of science and communication" という記述や、アメリカの経済力に伴うビジネス言語化の記述から正しい。

問9: 空所⑨に入れるのに、適切でないもの

文頭で「～を考慮すると」という分詞構文や前置詞句を作る表現を選択する。

• 文脈: "(⑨) the importance of English as a language of commerce and science, it is perhaps not surprising..."

• 正解: ③ Taking

•「～を考慮すると」という意味にする場合、Considering や Given、あるいは With (the importance ... in mindなどの形) が使われる。

• Taking を使いたい場合は "Taking ... into account" や "Taking ... into consideration" という形が必要であり、単独で名詞を置く形 (Taking the importance...) ではこの意味をなさないため、不適切である。

問10: 下線部⑩の段落内容と一致するもの

英語における権威の欠如と、各地の英語の平等性についての記述。

• ① The British government sets standards for English.

•【不適】本文に "English does not have a central language authority that sets the standards" とあり、政府などが基準を定めているわけではない。

• ② English has an equivalent to the Académie française.

•【不適】フランス語の Académie française のような機関が、英語には「ない (Unlike...)」と述べられている。

• ③ British English is recognized as the standard variety.

•【不適】特定の英語 (イギリス英語など) が標準なのではなく、各地域の英語 (アメリカ、オーストラリア、インド等) は「一般的に平等と見なされている (generally considered to be equal)」とある。

• ④ Australian English and Indian English have equal status.

- 【正解】前述の通り、各地域の英語(Singlishなども含む)はすべて平等であると述べられているため、オーストラリア英語とインド英語が平等なステータスを持つとするこの選択肢が正しい。

問11: 下線部⑪「This」が指す内容

指示語の指す内容を特定し、本文の主旨と合致させる問題である。

- 直前の文脈:「英語には中央機関がなく、それぞれの形態(イギリス、アメリカ、インド、シングリッシュ等)が一般に平等と見なされている」という状況を受けて、「これが、専門化された種類の英語の開発を可能にした」と続く。

- ① 英語が国際的に利用され、世界共通語となっていること

- 【不適】英語の広まりは事実だが、下線部の「これ(This)」が直接指しているのは「多様性の容認(平等性)」であり、広まりそのものではない。

- ② 英語には規範を定める機関がなく、多様な英語が認められていること

- 【正解】下線部の直前にある「中央機関がない(Unlike many languages...)」「各形態が平等である(considered to be equal)」という内容を正確に指している。

- ③ シンガポール英語はアメリカ英語の派生種とされていること

- 【不適】本文では、シングリッシュなどはそれぞれの地域の英語として「平等(equal)」に扱われると述べており、派生種として低く見ている記述はない。

- ④ 専門化した英語は、英語母語話者でないと難しすぎる

- 【不適】むしろBasic Englishなどは「国際的な意思疎通を容易にするため」に作られており、「難しすぎる」という記述は内容と矛盾する。

問12: 下線部⑫「Basic English」について一致しないもの

Basic Englishの特徴を述べた箇所(最終段落)から判断する。

- ① 1,000語に満たない単語からなる簡易化された英語である。

- 【一致する】"has less than 1,000 words" という記述と一致する。

- ② 1930年にCharles K. Ogdenによって開発された英語の一種である。

- 【一致する】"developed by Charles K. Ogden in 1930" という記述の通りである。

- ③ 多様な英語を一種類にまとめることで国際間の意思疎通を容易にする。

・【正解(不一致)】 Basic Englishは、あくまで「簡略化された一種(a simplified variety)」であり、既存の多様な英語(アメリカ英語やイギリス英語など)を「一種類に統合・集約(summarize)」するものではない。

・④ 製造会社の自社製品のユーザー向けマニュアルによく利用されている。

・【一致する】 "mostly used by manufacturing companies to write manuals" という記述と一致する。

問13: 下線部⑬(Airspeak等)について一致するもの

特定の目的のために作られた英語(専門英語)についての問い。

・① They are special kinds of language developed for English native speakers to communicate with each other easily.

・【不適】「母語話者同士(native speakers ... with each other)」のためではなく、異なる国籍のパイロットや警察官などの間の「国際的な(international)」通信のために開発されたものである。

・② They have a limited vocabulary used to easily communicate in international settings.

・【正解】本文の "for easy international communication" および "have very small vocabularies" という記述を的確に言い換えている。

・③ Because of their simplicity, they caused communication problems and accidents in the 1980s.

・【不適】因果関係が逆である。1980年代に「通信トラブルによる事故(accidents caused by communication problems)」が起きた後(after)、それを解決するために開発された。

・④ Because of their convenience, they are becoming the standard form of business English.

・【不適】これらはパイロットや警察などの「特定の専門職」のためのものであり、「ビジネス英語の標準」になったという記述はない。

問14: 下線部⑭「unique flexibility」について一致するもの

「柔軟性」の具体的な中身を問う問題である。

・① 英語には共通した形式があること

・【不適】柔軟性とは「形式が固定されている」ことではなく、状況に応じて「形を変えられる」ことを指す。

・② 英語には他には類をみない融通性があること

- 【正解】本文の "adapt it to their needs"(ニーズに適応させる)という記述は、日本語の「融通性(状況に応じて柔軟に対応できること)」と合致する。

- ③ 世界中で英語のニーズが高まっていること

- 【不適】ニーズの高まりは英語の普及の結果(success)の一部ではあるが、「柔軟性」そのものの説明ではない。

- ④ 英語には複雑な単語が数多くあること

- 【不適】語彙数が多いことは述べられているが、柔軟性とは「簡略化も複雑化も自由自在である」という適応力を指している。

問15: 本文の内容と一致しないもの

全体のまとめとしての正誤判定である。

- ① There are a variety of Englishes used around the world.

- 【一致する】"there are many Englishes, such as British English, American English..." と述べられている。

- ② English is an unusually flexible language.

- 【一致する】"its unique flexibility" として強調されている。

- ③ The English language has a complicated history.

- 【一致する】冒頭の "English has a long and complex history" と一致する。

- ④ Basic English is now regarded as the standard variety.

- 【正解(不一致)】本文によれば、Basic Englishは「専門化された種類(specialized varieties)」の一つに過ぎない。英語全体における「標準(standard variety)」になったという事実はないため、これが不一致となる。

和訳

イギリスから来たものの中で、英語はおそらく誰もが最も容易に特定できるものだろう。実際、英語には長く複雑な歴史がある。それは、5世紀にゲルマン語を話す部族であるジュート族、アングル族、サクソン族がブリテン島の先住民であるケルト人の間に定住した時に始まった。彼らの言語は、イングランドの北部や東部に定住していたヴァイキングの選ぶ古ノルド語と次第に結びつき、混ざり合って古英語となった。ノルマン人が現代のフランスにあたるノルマンディーから侵攻した後、古英語はゆっくりと中期英語へと変化し始めた。中期英語は、ノルマン人の話すフランス語、ノルマン征服以前に話されていた古英語、そしてローマ・カトリック教会が使用していたラテン語という3つの言語の組み合わせであった。最終的に1550年頃、中期英語は近代英語となった。

英語の複雑な歴史がもたらした結果の一つに、イギリス人の名前がしばしば様々な言語の混ざり合いであることが挙げられる。例えば、ジョン・バートンとアンソニー・セリックという名前を見てみよう。ジョンは、ヘブライ語(旧約聖書の原語)で「ヤハウェは慈悲深い」を意味する「ヨハナン」に由来する。バートンは古英語に由来し、「大麦の町」を意味する。アンソニーはローマの家族名である「アントニウス」に由来する。最後に、セリックはコーニッシュと呼ばれるケルト系の言語に由来し、「目立つ」という意味である。これらの名前は、先祖がイギリスの異なる地域から来たというヒントを与えてくれる。バートンはイングランド北部、セリックはイングランド南西部の出身である。つまり、多くのイギリス人は名前を通じて家族の歴史を辿ることができるのである。

この混交のもう一つの結果は、英語が非常に大きな語彙を持っていることである。実際、英語はおそらくあらゆる言語の中で最大の語彙を持っており、オックスフォード英語辞典には50万語以上が掲載されている。この膨大な語彙は、英語に大きな柔軟性を与えている。例えば、cow(古英語由来)は動物の種類を指すが、beef(フランス語由来)はその肉を指す。しかし、フランス語ではboeufという単語が牛とその肉の両方を指すのに使われる。英語はまた、外国語を非常に容易に吸収する。「スシ」や「カラオケ」のような言葉は、もともと日本語の一部であるのと同様に、今日では英語の一部となっている。

17世紀から19世紀にかけて、英語は大英帝国の言語として世界中に広まり、20世紀を通じてアメリカの経済力が発展するにつれてビジネスの言語として広まった。今日、英語は約3億6千万人の第一言語であり、約13億人の第二言語である。英語は30カ国以上の母国語であり、60カ国以上の公用語である。英語は科学と通信の国際言語となった。かつて、ウェブページの80パーセント以上が英語であり、科学論文の90パーセント以上が英語で書かれていると報告されたが、その著者の半分未満しか英語のネイティブスピーカーではない。商業および科学の言語としての英語の重要性を考慮すれば、英語を話す人の数が最も多い2つの国がインドと中国であると知っても驚くには当たらないだろう。

多くの言語とは異なり、英語にはアカデミー・フランセーズのような、言語の基準を定める中央機関がない。言い換えれば、それぞれの形態の英語は一般的に平等であると見なされる。その結果、今日ではイギリス英語、アメリカ英語、オーストラリア英語、インド英語、シングリッシュ(シンガポール英語)など、多くの「英語(Englishes)」が存在する。このことはまた、いくつかの専門化された種類の英語の開発を可能にした。

ベーシック・イングリッシュは、語彙が1,000語未満の簡略化された種類の英語である。それは、国際的なコミュニケーションをより容易にするために、1930年にチャールズ・K・オグデンによって開発された。今日、それは主に製造会社が自社製品のユーザー向けのマニュアルを書くために使用されている。エアスピーク、シースピーク、ポリススピークは、パイロット、船員、警察官が容易な国際通信のために使用する特別な種類の英語である。それらは、1980年代にいくつかの事

故が通信上の問題によって引き起こされた後に開発された。それらは非常に少ない語彙しか持たないため、学習や理解が容易である。

おそらく、英語が永続的な成功を収めている理由は、その独特の柔軟性にある。英語の話手は、自分のニーズに合わせて英語を適応させることができる。語彙の少ない簡略化された言語を必要とする場合でも、何万もの単語を持つ複雑な言語を必要とする場合でも、自分に適した英語を作ることができるのである。そうして、世界中の人々とコミュニケーションをとるためにそれを使用することができるのである。